

●博士学位請求論文要旨

「介護者の会」による援助特性 — 介護者支援の社会化をめぐる —

尹 一喜

1. 研究の背景および問題意識

介護保険制度が施行され、介護が社会化されつつあるが、介護者が抱える悩み等の精神的な負担に関しては、社会的サービスでは満たされない部分であり、介護者一人が抱える負担と責任が軽くなってきているわけではない。

平成26年版高齢社会白書によれば、介護保険制度における要介護者または要支援者と認定された人は、平成24年度末で561.1万人となっており、平成13年度末から262.8万人増加している。現在、要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしい生活を人生の最後まで続けられることを目的とする地域包括ケアシステムの構築をめざし、医療提供体制、介護保険制度ともに大きな改革が進められているが、地域ケアを強調するほど、在宅で介護を担う介護者自身の生活の質の担保が懸念される。

家族形態は、2014年の国民生活基礎調査によれば、高齢者のみの世帯（高齢者単独世帯と高齢者夫婦のみの世帯）が55.4%であり、子どもと同居する世帯（40.6%）を上回っている。しかし、高齢者扶養意識（内閣府「家族の法制に関する世論調査」2012年）をみると、「親の世話をするという介護面」は2006年よりも2012年が2%増加しており、介護が家族の役割だと感じている人はむしろ増加している。在宅介護を担う主介護者は同居の親族が62.6%（「平成28年度高齢者白書」2016年）であり、介護者の高齢化や、主な介護者が子の配偶者から実子へと移行し、さらに、男性介護者の増加が見られており、介護者像は多様化している。

介護者は要介護者を支える人や資源ではなく、介護者自身が支援を必要としている。介護者に焦

点をあてた研究、すなわち、介護者をひとりの人間として、その人の生活の質（QOL）を保障するために、介護者が求める介護者支援を明らかにする研究が求められている。「家族であればやって当然」ではなく、介護者が自分の資源（身体、メンタルヘルス、自分の生活、身につけたいキャリア等）を枯渇させることなく介護を全うするためには、介護者が社会的にきわめて弱い存在であるからこそ、介護者支援、介護者に対する保障の社会化という視点が必要である。このような観点から、介護者の会への参加が介護者にもたらす影響、援助特性を一般化する研究を行う必要がある。

これらをふまえて、3つの問題意識が整理された。

- ①介護者をひとりの人間として捉える研究が欠如している。
- ②介護者の会が果たす機能と介護者に及ぼす影響との関連は明らかではない。
- ③介護者の会への参加が介護者にもたらす影響を一般化するための量的研究が必要である。

2. 研究目的

本研究の目的は、以下4点である。

- ①介護者の会の参加者の実態と介護者が求める支援を把握する。
- ②専門職による支援と介護者の会による支援の違いから、介護者の会の援助特性を明らかにする。
- ③介護者の会による内部機能を分析することが、介護者支援の社会化にとってどのような意味をもつのかを考察する。
- ④介護者支援の在り方や介護者支援の社会化について提起する。

3. 研究仮説

研究目的を検証するために、以下のように研究仮説を立てた。

①介護者の会は、社会的サービスでは満たされない部分を支援しているのではないか。②介護者の会による支援は、専門職による支援と異なるのではないか。③介護者の会による支援は、介護者支援の社会化にとって独自の機能を持っているのではないか。

4. 用語の定義

- 1) 介護者：家族の一員に介護が必要になった場合、その介護を担っている家族員。
- 2) 介護終了者：要介護者を看取り終えた介護者を、介護終了者とする。
- 3) 介護者の会：要介護高齢者を介護する介護者の集いであり、要介護高齢者の疾病名や介護者の続柄で限定されたものではない。また、本研究で対象とした「介護者の会」は、行政主導・市町村の保健師などの呼びかけで結成された会ではなく、首都圏を中心として、それぞれの地域で、介護者が自主的に結成した会であり、特定のミッションに偏らず、様々な介護者がもつ悩みや問題に基づいた介護者の自主的・自発的な組織である。

5. 研究デザイン

介護者支援の取り組みの現状と、介護者自身が望んでいる介護者を中心とした介護者支援を把握し、介護者を支援する組織の一つである「介護者の会」参加者を対象として、「介護者の会」による支援がどのように役立ちどのような意味を持っているのか、専門職による支援と異なる部分があるのではないか、「介護者の会」による援助特性を明らかにする研究を行うこととした。

研究目的に沿って、調査Ⅰ「「介護者の会」による支援に関する質問紙調査」、調査Ⅱ「「介護者の会」による支援に関する質問紙調査の自由記述分析」、調査Ⅲ「介護終了者へのインタビュー調査」

という3つの調査を実施した。

調査Ⅰ「「介護者の会」による支援に関する質問紙調査」は、「介護者の会」の参加者の支援ニーズの概要を把握するための調査である。「介護者の会」参加者を対象に、参加者の実態を把握するとともに、「介護者の会」による支援とケアマネジャーによる支援との違い、介護者が求める支援ニーズを把握した。この調査では、「介護者の会」参加者の42%が、介護を終了した後も「介護者の会」に継続参加している者（以下：介護終了者）であることが明らかになった。なぜ継続参加しているのか、その理由や介護終了者の「介護者の会」での役割についてさらに研究する必要があることが見えてきた。

調査Ⅱ「「介護者の会」による支援に関する質問紙調査の自由記述分析」は、介護者にとって、「介護者の会」による支援がどのような意味を持っているのかを明らかにするための調査である。「介護者の会」による支援に関する質問紙調査の自由記述項目である、「介護者の会」に参加して一番良かったこと、を質的に分析した。

調査Ⅲ「介護終了者へのインタビュー調査」は、介護終了後も「介護者の会」に継続して参加している人を対象に、「介護者の会」による支援が、介護者支援の社会化にとってどのような意味をもつのかを考察するための調査である。介護終了者を対象として調査を行った理由は、「介護者の会」に入った経緯、「介護者の会」で得た援助、さらには、介護終了者として「介護者の会」に継続参加している理由、現在行っている役割や支援内容について、長いプロセスをふりかえって言語化することができる、介護終了者に焦点をあてた研究は見当たらないからである。

調査Ⅰ・調査Ⅱ・調査Ⅲの3つの調査結果より、「介護者の会」の援助特性、「介護者の会」の内部機能について総合的に分析・検討した。

6. 本論文の構成

序章では、研究目的と目的にもとづく研究仮説を示した。また、本論文の構成を概観した。

第1章では、第1節により高齢者扶養意識について

て社会調査結果と家族社会学の文献等を参考に検討した。その結果、高齢者扶養意識について、介護保険制度開始後も親の介護は家族の役割であると認識している人が増えていることが確認できた。第2節では、介護保険制度が施行され、介護が社会化されつつあるが、介護者が抱える悩み等の精神的な負担に関しては、社会的サービスでは満たされない部分であり、介護者一人が抱える負担と責任が軽くなってきているわけではないこと、また、介護者像は変化し多様化しており、介護者に対する社会的支援が促進される必要があることが明らかになった。

第2章では、介護者支援に関する取り組みの現状について検討を行った。第1節では、国・自治体による取り組みの現状について検討し、介護者支援の基盤となる法制度は十分に整備されていないことが明らかになった。第2節では、民間団体による取り組みの現状について検討を行った。民間団体による支援は、より現実的であり、介護者に寄り添った支援が行われていることが確認できた。

第3章では、介護者と介護者支援に関する先行研究（介護者の実態および働く介護者の実態に関する研究、介護の概念化・理論化に関する研究、介護者支援および支援プログラムの開発に関する研究についての文献研究）から、本研究の理論的背景を明らかにし、さらに本研究の位置づけを明らかにした。

第4章では、本研究の調査対象である「介護者の会」を相互援助グループととらえ検討を行った。第1節では、Shulmanの援助過程技術論をもとに、相互援助システムとしてのグループの諸機能について検討を行った。第2節では、相互援助グループ中、セルフヘルプグループとサポートグループを取り上げ、それぞれの特徴と機能について検討した。さらに第3節では、福祉領域における相互援助グループに関する先行研究について整理した。

第5章では、「介護者の会」参加者を対象（n=231 回収率52.8%）に質問紙調査を行った。回答の分析を通じ、介護者自身が望んでいる介護者支援を明らかにするとともに、「介護者の会」による支援と、ケアマネジャーによる支援とを、比較検討した。その結果、ケアマネジャーから受けている支援で

は、「サービスや制度についての説明」の数値が最も高く、「介護者の会」による支援では、「介護者の悩みごとを聞く」の数値が最も高かった。ケアマネジャーからは、サービスや制度に関する情報や助言を、「介護者の会」からは、共感・分かち合えることで心理的な支えを得ており、それぞれ受けている支援の内容が異なっていることが明らかになった。また、ケアマネジャーと「介護者の会」による支援の各項目の平均値の差を出してみると、「介護者の悩みごとを聞く」という項目の差（ケアマネジャー：3.31、「介護者の会」：4.31）が一番大きく0.1%水準で有意差が認められた。要するに、ケアマネジャーには、悩みごと等の本音が言いづらい部分があるが、「介護者の会」では、自分と同じような問題や悩みをもつ人たちがいるので、抵抗なく本音が言えているのではないかと考えられる。

第6章では、質問紙調査の自由記述（現在介護中の人：72名、介護終了者：71名）を川喜田（1986）のKJ法を参考に質的に分析を行い、「介護者の会」で行われる参加者同士の相互援助過程を把握した。介護中の人と介護終了者の自由記述を分析した結果、7つの同じカテゴリーが抽出された。「介護者の会」における相互援助過程は、「「介護者の会」に参加することで得られるもの」と「介護者自身の内部における変化」にまとめられた。「「介護者の会」に参加することで得られるもの」は、参加者がお互いに情報源となり、「介護者の会」に参加することで自然に得られるものである。他の参加者から発せられる知識、意見、価値観などの情報や事実を聞くことにより、問題に対する異なった洞察が深まる。共通課題を達成するために多くの情報が必要となるが、相互援助グループにおいてはお互いが情報源となることが可能であり、情報・事実を分かちあうことができる。また、「介護者自身の内部における変化」は、「「介護者の会」に参加することで得られるもの」を受けて、介護者自身の中で醸成される過程とも言える。

第7章では、介護終了者11名に対するインタビュー調査を行い、佐藤（2008）の定性的コーディングの手法を用いて質的分析を行った。結果、介護者にとって「介護者の会」による支援がもつ意

味を明らかにした。「介護者の会」では、「言いたい放題」息抜きができる、「出会えた喜び、同じ立場の人で共感できる」共感・連帯感が得られる等の、情緒的なサポートを得ていた。さらに、「自分の立ち位置が確認できる」、「“ありがとう”と言われる」、「施設にお願いしてもよい等と自分の判断に対して同意が得られる」等、他者と比べて自分の状況をとらえ直せる、感謝の言葉が聞ける、決断に対する後押しをしてくれる等、承認サポートを得ていた。

介護者は「介護者の会」参加することによって、自分が集団から価値ある存在と認められ、尊重され、承認欲求を満たされる。要するに、介護を担う人ではなく、ひとりの人間として承認されることである。以上のように、介護者にとって「介護者の会」は、人として承認される時間と空間を提供してくれる場であることが明らかになった。特に、承認サポートは「介護者の会」でしか得ていないものであった。

介護を終了しても継続して「介護者の会」に参加していることで、介護仲間が友達になり、「介護者の会」内での活動から地域・社会の活動に広がっていた。また、介護をしているときに、会の仲間から助言を得、精神的な面で支えられた経験から、その恩返しとして、現役の介護者や次の世代に貢献したいということが明らかになった。

終章では、第1章から第7章によって明らかとなった研究結果を総括した。また、本研究によって最終的に得られた知見と成果を述べ、「介護者の会」がもたらす内部機能と相互援助過程について考察を深めた。さらに、介護者支援の社会化をめぐる方向性について提起した。

最終的に、研究仮説に対して、本研究で明らかになったことは、以下の5点である。

①「介護者の会」は、“ひとりの人間”として承認される時間と空間

「介護者の会」がもつ独自の機能として、「介護者の会」は、介護を切り離して“ひとりの人間”として認められる場であった。「自分の立ち位置が確認できる」、「“ありがとう”と言われる」、「施設にお願いしてもよい等と自分の判断に対して同意が得られる」等、他者と比べて自分の状況をとらえ直せる、感謝の言葉が聞ける、決断に対する後押しをしてくれる等、承認サポートを得ていた。

とらえ直せる、感謝の言葉が聞ける、決断に対する後押しをしてくれる等、承認サポートを得ていた。介護者は「介護者の会」参加することによって、自分が集団から価値ある存在と認められ、尊重され、承認欲求を満たされていた。

②共通の体験を持っている人同士だからこそできる深いレベルの共感

介護者は、「介護者の会」からは、共感・分かち合えることで心理的な支えを得ており、ケアマネジャーからは、サービスや制度に関する情報や助言を得ていた。また、「介護者の会」では、介護という共通の体験的知識をもっていることが基礎となっており、それはケアマネジャーからは必ずしも得られるものではない。

「介護者の会」では、自分と同じような問題や悩みをもつ人たちがいることで、抵抗なく本音を出せるのではないかと、また、「介護者の会」では、相談する相手が、家族介護を行った経験者だからこそ相談できる内容があると考えられる。「介護者の会」では、参加者同士がお互いに情報源になり、他の参加者から出てくる知識、意見、価値観などの情報や事実を聞くことにより、問題に対する異なった洞察が可能となる。

近親者を介護するという経験は、家族が抱く「大切な存在として介護をしたいという気持ちと同時に、早く介護が終わってほしいと願う気持ち」等のアンビバレントな感情をもたらず特別な経験であり、そのような経験は手を差し伸べてくれるはずの専門職にも受け止めてもらえないという現実がある。その時、その気持ちをそのまま受け止めてくれる同じ体験的知識をもつ介護終了者は、現役の介護者にとって、一つのロールモデルになる。

③組織としての「介護者の会」がもつ力

「介護者の会」では、理解してくれる人と出会う。誰かひとりの体験的知識では心もとないものに感じるかもしれないが、「介護者の会」という組織化されたグループの中で体験的知識を共有することは、説得力をもつ。自分の状況をさらけ出し、自分の立ち位置を確認することによって、介護者自身の内部で変化が起こる。援助を与える側と受け

る側が共通の課題を抱えていることによって、深いレベルで共感し、実感を伴って理解することができる。これは、Riessman (1965) の、人は援助をすることで最も援助を受ける、という「ヘルパーセラピー原則 (the helper therapy principle)」と一致する。一人の参加者として、直面した問題に圧倒されて悩んでいたのは、自分だけではないことを発見した時、あるいは、みんなが同じように悩んでいることを発見した時、安心し、積極的にその問題に取り組んでいくことが可能となる。また、このことは、相互援助過程において、参加者に変化を起こす力となる。

④「介護者の会」の新たなとらえ方

今回の「介護者の会」には、42%の介護終了者がおり、介護終了者が現役の介護者をサポートしていた。専門職からの支援を受けているわけではないが、介護終了者の助言を受けながら、解決あるいは受容を目指すという面でサポートグループの特徴を持っていた。すなわち、「介護者の会」は、介護者同士のピアグループでありながら、介護終了者からサポートも得るといふ、二つの機能を同時に持つグループであることが判明した。「介護者の会」は、セルフヘルプグループとサポートグループという既存の相互援助システムではとらえきれない第3のタイプの相互援助グループとして捉える必要があることが見えてきた。今後、このような組織の機能がもたらす効果と意義についてさらに検討が必要である。

介護終了者は、なぜ「介護者の会」に継続参加しているのだろうか。介護は一時的な役割であり、介護が終了すれば、介護者ではなくなる。また、介護をするときには、娘・嫁・息子という家族としてのそれぞれの立場があったが、介護が終わると、その立場性もなくなる。介護を担う介護者でいるときは、日常生活では、役割期待や立場性から逃れることは難しい。しかし「介護者の会」では、体験的知識をもつ介護者同士が共感を伴って理解し、これまでやってきたことを承認されることによって、介護者から介護を切り離して“ひとりの人間”になれる。このような、相互援助過程を経て得られた自己肯定感は、介護が終わって重荷か

ら解き放たれた時、介護に注いできたエネルギーを、現在介護している人をサポートすることに注ぐ意欲に転化するのではないかと考える。

⑤地域・社会に広がる介護者の会の活動

介護者に対する支援を考える時、要介護者と介護者、または専門家と介護者との二者関係だけに焦点をあてることが多い。しかし、介護者支援に関する公的な仕組みが乏しい中、二者関係だけに焦点を当てて支援を行うことには限界がある。「介護者の会」は複線的にとらえて支援を行う際の有効な資源になる。特に、介護終了者は、会の仲間から助言を得て、精神的な面で支えられた経験から、その恩返しとして、現役の介護者や次の世代に貢献したいという思いもあり、「介護者の会」内での活動が、介護終了後に地域・社会の活動に還元されていくことも見えてきた。

さらに、これらの「介護者の会」が横につながれば、介護者が抱える問題を吸い上げ、介護者の会という当事者組織が個々の介護者の抱える問題を社会に発信していく代弁的機能をもつことも期待できる。「介護者の会」は、介護者支援の社会化の核となるポテンシャルを秘めていると考えられる。

7. 本研究の課題と今後に向けて

本研究は、NPO法人介護者サポートネットワークセンターアラジンが持つネットワークに登録された「介護者の会」を研究対象としている。介護者の会に参加している人は氷山の一角であり、隠れている母集団は全く見えない。つまり、会に参加していない介護者を対象とした大規模調査を行い、介護者が求める支援内容を明らかにする必要がある。

今回の研究対象であった、「介護者の会」には、介護終了者が42%いたが、このような人々の存在意義について、さらなる研究が求められる。また、介護終了者の「介護者の会」での役割を明確にするためには、対照群である、介護終了後に「介護者の会」を離れた人を対象とした研究を行う必要がある。さらに、今回は、首都圏を中心とした調

査であるため、今後農村部や過疎地域などの「介護者の会」でも同様の調査を行い、地域特性による差異があるのか、検討していく研究が必要であろう。

また、続柄別に求める支援内容を明らかにすることや、特に実子・男性介護者の求める支援に注目した分析を行い、より現実に即した支援に結び付けていく必要がある。

今後、今回の結果をふまえて、「介護者の会」という当事者組織が個々の介護者の抱える問題を社会に発信していく代弁的機能について更なる研究を行い、介護者支援の社会化について考察を深めたい。